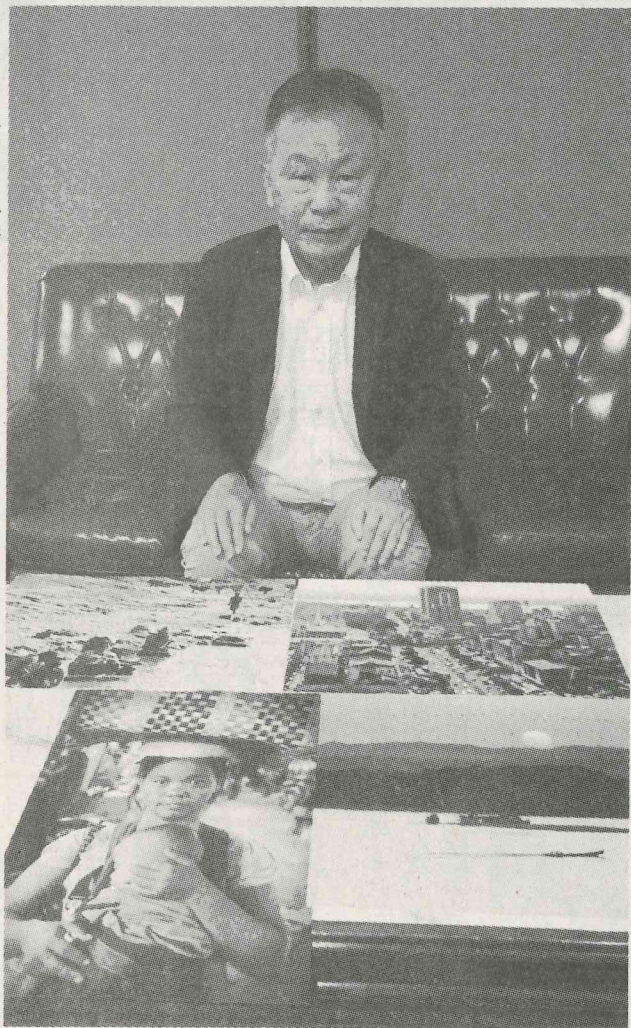


「ミャンマーを忘れない」

28日から写真展 土々呂町の極楽寺

JICAの県北 アドバイザー 富山さんが企画

「ミャンマーを忘れない」と題した写真展が、28日から7月7日まで、延岡市土々呂町の極楽寺で開かれる。昨年2月の国軍によるクーデター以来、民主派への弾圧が続く同国の困難に目を向けてほしいと、延岡市緑ヶ丘在住のJICA九州宮崎県北地域国際協力アドバイザー富山隆志さん(69)が企画した。多くの来場を呼び掛けている。入場無料。



ミャンマーで撮影した写真を見せながら、クーデター後の同国の状況を話した富山さん

毎日のように現地とメリメリしている富山さんによ「在、都市部は落ち着いてそこに暮らす少数民族や

延岡

政の反対者と国軍とのゲリラ戦が続いている。平穩に見える都市部も、学校は再開されておらず、国立病院も機能していないという。

クーデター前に政権の座にあった国民民主連盟(NLD、アウン・サン・スー・チー党首)は、税制を制定しようとしていた。自由にビジネスができ、利益を税金として国に納める税制ができれば経済が成長する。その期待から、日本を含む海外企業が同国に進出。延岡市との人材・経済交流も深まりつつあった。2014年に延岡・ミャンマー友好会が発足。これまでに研修生と関係者計約150人を受け入れたが、コロナ禍で20年2月

から中断。クーデターが起ったのはその1年後だった。

「延岡に来た人で内戦のため亡くなった人はいないが、3回も来延し、今後の交流の核となるはずだった女性(40代)がコロナで亡くなった。国軍に投獄された人も入っている」という。

写真展を企画したのは、来延した研修生を気遣い、「何かできないか」との声を聞いたことがきっかけ。

14、19年に自身が最大都市ヤンゴン、首都ネピドー、古都マンダレー、インドに近い町モンユワなどで撮影した33点を展示する。富山さんは当時、延岡との経済交流の打ち合わせのため、年2、3回行き来していたという。

が贈った清本鉄工の食品加工機「真実フライヤー」を使って現地で作られた果物のチップスのほか、バッグ、靴、書籍、コーヒード豆など現地の生活用品も併せて展示する。研修生の延岡でのホームステイや研修の様子を記録した動画も流す。

「ミャンマーの生活、文化、自然を感じてもらえればうれしい。ロシアのウクライナ侵攻以降、ミャンマーに関する報道が減っているが、困難な状況が続いていることを忘れないでほしい」と話した。

極楽寺での開催は午前11時から午後5時まで。会期中の7月3日にはトークイベントも予定している。午後3時から同寺の柳田泰宏住職による祈りと講話。同4時から富山さんがミャンマーとの

2022.6.20